

わが心の自叙伝

金子武藏

この学部創設のことについたつたのは、哲学科時代の恩師故伊藤吉之助先生であったが、私が併任の難を忍ぶことによって、ともかくも先生の事業存続に寄与したのは幸いであった。

私が定年まで職にとどまることをえたのは同僚諸氏のご芳情によることである。ことに何ごとにつけでも打ち明け相談することでのきる二、三の友人をえたのは望外のしあわせだった。しかし同時に和辻教授の後任という地位に負うところ多大である。ところで和辻先生がいなが武士のような私の頑愚と強情とを忍んでよくご自分の後継者にまで育てて下さったのには、先生がかつて京大文学部において私の岳父幾多郎より受けた恩顧に報いんとする意向も働かいていたことはいなめない事実である。ここからすれば、定年の辞を



級生のこと回到顧してみると、体力において才能において私よりはるかにすぐれた人々がいたのに、それらの人々に比して私は最上の地位に定年までとどまりえたわけであるが、そこまで考えると、由来は実父直吉にまでさかのぼるといわざるをえぬ。

私の自叙伝を書く資格をもつものではない。ただ由来がそうさせられるだけなのである。

昨年九月より本年二月まで事情あって渋谷の仮寓に住んださい、閉口したことがあるが、その一つはカラ紙一重の隣室には高校一年の末っ子がいて、これが勉強となるとなんでも音読するということであつた。ある晩、ことのはかさわがしいのでとがめると、今夜中にこれについてレポートを書かなくてはならぬと訴える。見れば中記からとった「刑罰秦に入る」という文章である。こいつ寝るまで

夕刻の帰宅にさうして会わない人
はいくらでもいる」と答えた。な
るほどもとで時勢の変化はい
かんともしがたいことを感じはし
たものの、燕の太子丹の知遇に感
じ、秦王に献すべき肥よく地督トクヨウ
亢の地図にアイクチをひめ、易水
のほとりにおいてこの歌をうたつ
て太子に別れ、車にのってからは
もはや後ろを見なかつた荆軻の姿
には私にとつてはなにか切々とし
て訴えるものがありおのれの既往
を顧みてうたた感慨にたえないの
である。

一月二十一日で、育つたのは雲井通五丁目（神戸市葺合区）にあつた鈴木商店の樟脳会社兼工場の住宅である。

この家がどんな構造のものであつたかは、なにぶんにも四、五歳のころまでしか住まなかつたのでよくは覚えていない。通りから少しのぼり坂になつて奥まつたところに工場の黒い大きな門があつたが、門をはいると左手にあるのが、両親、兄文藏、亡妹常子と共に私の住んだ家であつた。勝手口からはいると台所があり、そこには井戸もあつたが、その左側に南向きの二間があり、これらが子供部屋であつた。これ以上のことはハッキリしないが、当時父の「書生さん」であった小野三郎氏のお話をあわせ考えると、勝手口より北に玄関があつて、これが応接間や父母の居間に通じ、さらに二階には十畳ばかりの広い部屋があつ

一ヤンと子供部屋で時をすごした。オモチャにもあきると、よく小高いところにある格子にぶらさがって往来の人々をながめるのが楽しみであった。あるとき買い物帰りの親しいおばさんを見つけて歓声をあげて呼びかけたことを覚えてる。このおばさんは故田宮氏の夫人かね子さんであつたと思つが、私の生まれた三十八年九月には、父は神戸製鋼所を創立しているから、十分ありうることである。田宮氏夫妻はのちに私ども夫婦の事実上の媒酌人としてなくされとなく、お世話を下さつたが、全く不思議なご縁というほかはない。また毎晩ネーヤンにおんぶされて、あかあかと灯をともしてはしる電車をみて大喜びであった。

のべえたことは岳父の恩に由来することになる。しかし小学生時代（私は五年の終わりまで須磨浦尋常小学校）と、神戸市に通学した）と中学生時代（高知県立第一中学校）との間で、何をもたらすか、よく思ひません。

「叫びをなけ時鳥」と詠じている。判刑の詩に深く感動する私には、なにか父に深く通ずるものがある。ように思うのである。

昭和十三年に父が鈴木よね刀自にささげた弔詞を読みかえすと、昭和三十六年に私が和辻先生にささげた弔詞と調子において全く同じなのである。

て故小林恒四郎氏や小野さんなど
書生さんにあてられていました。

当時から私どもの家庭は人様な
みではなく変わっていた。私の変
わりものであることは、すでにこ
こに胚胎するのである。物覚えが
悪いからでもあるが、とにかく
父母と食卓を共にしたという記憶
はない。父は多忙であり、母も病
氣で、直接こどもが日記に記ること

にとどまることをえたのは、ひとえに同僚諸氏の寛大なるお取りはからいによることでござります。たとえ拙劣であっても、また意見の相違はあっても、誠意をもってことに当つてみれば、それでお許し下さるという皆様のヒューマニズムの賜物でござります。たしかに長い間のご芳情でございまして。戦前は強力なる主任教官の城壁にまもられて、楽しく研究にいそしみ、時には野球に興じ、学部大会で英文や社会との試合に参加したことなどございました。そのうち時勢がきびしくなり、I学部長引率のもとに、千葉県の検見川に

た。当時、私は今までいえ第一委員会に所属しておりましたため、閉鎖を強行するに先立つて、学生に自発的撤去を勧告するという役に当たらざるをえなくなり、日曜日の朝十時ごろから（ただし私自身は十二時ごろから）夜十時ごろまでO先生、H先生、F先生などと説得につとめました。そうして十分ごろにはとうとうカンシャクを起して閉鎖のほかなしという復命をしたことを覚えております。実始末として学友会改組の問題が生じるまで臨時にご出勤を願わなくてはなりませんでいたし、またあとへ旋は容易ではなく、委員ではない先生まで容易ではなくてはなりませんでいたし、またあとへ

て感謝のほかございません。
一昨年の十二月から昨年の十二月まで、さる事件のあと始末のため、他の大学の文学部に併任して職を奉じましたが、委嘱された職務をこの短い期間にはば終了することでのきましたのも、関係教育官を中心とする皆様のなみなみならぬご芳情の賜物でございます。

定年ではたして職にとどまる
ことができるかを危ぶんでいた身
が、ともかくも定年の辞をのべる
ことができた。しかし、この辞は
いったいなに由来しているであ
ろうか。

ところで東大というのは、一種
のアイドルである。だから、ただ
東大に職を奉じてているというだけ
の理由で、三十年にわたる在職期
間を通じて、世間の皆様より過分
の待遇をかたじけのうしたことは
私の非常なしあわせであった。し
かし私の場合には、これにつきな
い。それは昭和十三年から二十四
年まで、故和辻哲郎先生と机を向

年より三十四年にかけては、幸か不幸か文学部長に就任し、人文研究科委員長をもかねたが、これはひとえに、和辻教授の後任という地位のしからしむるところである。その後は学部内におけるプレスピーター（「長老」といった意味）の一人としてすこし、三十八年には年齢が規定を越えているにもかかわらず、学長特別のはからいによって文部省研究員として外遊し、あこがれの歐米風物に接して年來の渴をいやすことができた。そうして同年の十二月から昨年の十二月までは、北大文学部に併せ部長の職にあつたが、これはさる

アルコール用のいも掘りに参りました。でも、責任のない当時の私にとっては、これとてなおエキスカーション（遠足）のようなものでございました。

戦後となり、そうしてやがて主任教官の防壁がなくなつてからは、授業以外のいろんな職務についてました。同じ三月に起つた事件だけを申し上げますと、学友会の部屋に全学連のハンコのあること

その後ハンストにあって、皆様のご援助をかたじけのうしましましたが、これ以後のことは大部分の方々がよく存じのことなのでここで申し上げません。

在職期間を顧みて、時勢の変化には、急激かつ深刻なものがあつたというのほかございません。今後も同様でございましょうが、その間に処して、光輝ある伝統と本来の使命とを守りつつ、よく時勢の変化に対応することは容易なわざではございませんが、これに関して、私はもはや陰ながら皆様の懇請する次第でございます。

声大学の内外に高かつた先生は、かりでなく、研究上においても懇切なるご指導を賜わった。当時名私にとっては強力無比の城壁であつて、これにかこまれた私は学部内における一切の難事にわずらわされることなく、専心学業に没頭し、時には学生と野球に興ずることをえたのである。

先生の御退官とともにしだいに研究以外の職務が多くなり、両者

じて、その解決には六月中旬までかかり、全く閉口しました。しかし、ともにことに当った諸先生のお姿はいつまでも私の追憶のうちで三つさがるございましょう。

民)として今後はほぼゆうゆう自適の日々を楽しみ、その間でされば研究計画画のある程度まででも成就することを念願しております。肝も二つに二つきほへこゝ、今

かい合わせて研究室をともにした
ことである。先生は何ごとにつ
けてもファーストクラスの人物で
あった。私は先生のもとにおいて
物、こゝの几帳の土方を見習つこぎ

二、三歳のころにはよほど珍しいものであったであろう。

私たちの住んだ家が樟脳の会社兼工場の社宅であったのは、七七年に先代岩治郎氏が永眠せられたからち、父が鈴木商店にて樟脳の担当者であったからである。したがって父は一方ではこの会社兼工場の管理にあたると同時に、当時は栄町三丁目にあった鈴木商店に番頭として通勤していた。番頭さんらしく和服をきて角帯をしめていたといふから、その格好たるやなんともお話にならないものであろうことは、不肖は不肖でも外形だけは酷似している私は想像するにかたくないのです。三十六年に鈴木商店が大里製糖所を創立したのは、当時取り引きをしていた大日本製糖の専務某氏が愛妓に宮ませている料亭で酒をのまないと砂糖を渡してくれないのが父にとってはシャクにさわってたまらず、相番頭たる柳田富士松氏などとケツネウドンをすりながら謀議を重ねたことに始まる。三十一年に父は四十二年になつたのであることは、不肖は不肖でも外見だけは酷似している私は想像するにかたくないのです。三十六年に鈴木商店が大里製糖所を創立したのは、当時取り引きをしていた大日本製糖の専務某氏が愛妓に宮ませている料亭で酒をのまないと砂糖を渡してくれないのが父にとってはシャクにさわってたまらず、相番頭たる柳田富士松氏などとケツネウドンをすりながら謀議を重ねたことに始まる。三十一年に父は四十二年になつたのであることは、不肖は不肖でも外見だけは酷似している私は想像するにかたくないのです。三十六年に鈴木商店が大里製

していだ。今にして思えば田宮氏や服部馬太郎氏など多くの人々が

出入りして、そこは一種梁山泊の観があつたわけである。無頼着な銘は客が気にいる、床の間の掛け軸をはずしてこれを持って行けた。番頭さんらしく和服をきて角帯をしめていたといふから、その格好たるやなんともお話にならないものであることは、不肖は不肖でも外見だけは酷似している私は想像するにかたくないのです。三十六年に鈴木商店が大里製糖所を創立したのは、当時取り引きをしていた大日本製糖の専務某氏が愛妓に宮ませている料亭で酒をのまないと砂糖を渡してくれないのが父にとってはシャクにさわってたまらず、相番頭たる柳田富士松氏などとケツネウドンをすりながら謀議を重ねたことに始まる。三十一年に父は四十二年になつたのであることは、不肖は不肖でも外見だけは酷似している私は想像するにかたくないのです。三十六年に鈴木商店が大里製

が、それはちょうど樹下でセミがいくらないてもつんぽのオヤジには少しも聞こえないのと同じだと報いたわけ。句の巧拙はともかくなかなかにユーモラスである。これを境として無頼着な父も内心ではやや安んずるところがあつたよう。それ以後は、専門のちがいがかかるて氣を樂にするらしくいろんな問題についてあたかも学友のごとく愉快に談論した。これですめば世間の人様なみであるが、父の場合はそうはいかない。やがて私は結婚してしばらく父と居を別にすることになったが、十二年のころ、上目黒一丁目一二六番地に家を借り、ここで松町と同じような生活がつづいた。ところが十五年の夏の宵に、父は私に東京以北で自分が經營している事業を視察せよと命じて、草津の万座硫黄や北海道の羽幌炭鉱を視察させた。

ところでその後、父はこのことに一向触れたがらなくなつたが、助教授となつてゐることをどうぞは注意されたのかいすれかであらう。器の方は父には初めから十分わかっているはずであるから、多分後者である、無頼着

の苦労はなみたいていではなかつたであろう。客が去つてから、父は沈思默考、深更まで書類をしたためる。そうして、これを清書するのが書生さんの役であった。母の協力も、むろんあつたであろうが、教育にも無関心ではなかつた。四十一年になると、兄はすでに小学生に通学していたが、書生さんは秘書たると同時に兄の家庭教師でもあつた。習字のことで父が兄および小野さんとなにか話を合つていたのをかすかに覚えていた。また近所に外人宣教師夫妻の経営する幼稚園があり、私は妹と一緒に通つたが、クリスマスの日に赤い大きな風船をもらって、得々として帰宅したことによく覚えている。

しかし、幼稚園に通つていることになりなんで、とにかく宗右衛門町あたりでもてるよう柄ではない。しかしお父は精励よくことに当たりで忙をきわめていた。父が帰宅すると家のなかは急ににぎやかになり、応接間にはよくたか声が

ると晩年についていたが、さもありなんで、とにかく宗右衛門町あたりでもてるよう柄ではない。しかしお父は精励よくことに当たりで忙をきわめていた。父が帰宅すると家のなかは急ににぎやかになり、応接間にはよくたか声が

として育てる意思があつたかといふ。亡父(直吉)には、私を実業人として育てる意思があつたかといふ。うと、やはりそうと答える方がたらしいようであるが、これについては、いくつかのことが思い出される。

第一は大正六年の暑中休暇に当ろから家には変化の生じつたある。これが子供心にも感ぜられた。どうだけの期間かは覚えていないし

まだ母の療養という目的もあつた。であろうが、ある夏、住吉あたりの海岸に転居していくことがあり

た。第二には、大正七年のころ、中学生として立志の年ごろとなつていた私が鳴尾の製油工場の見学をさせられたことである。

第三には、昭和三年三月東大の哲学科を卒業した私は上京中の父に大学院に入学したい旨の希望を申し出たが、當時苦境のどん底にありながら、父はして反対はしなかつた。しかしそうどかたわらに居合わせた故狩野藏次郎氏は

私に向かって経済学部に学士入学させられたことである。

第四には、昭和四年五月東大の哲学科を卒業した私は上京中の父に大学院に入学したい旨の希望を申し出たが、當時苦境のどん底にありながら、父はして反対はしなかつた。しかしそうどかたわらに居合わせた故狩野藏次郎氏は

私に向かって経済学部に学士入学させられたことである。

第五には、昭和五年三月東大の哲学科を卒業した私は上京中の父に大学院に入学したい旨の希望を申し出たが、當時苦境のどん底にありながら、父はして反対はしなかつた。しかしそうどかたわらに居合わせた故狩野藏次郎氏は

私に向かって経済学部に学士入学させられたことである。

第六には、昭和六年五月東大の哲学科を卒業した私は上京中の父に大学院に入学したい旨の希望を申し出たが、當時苦境のどん底にありながら、父はして反対はしなかつた。しかしそうどかたわらに居合わせた故狩野藏次郎氏は

言、もっともなり、大学院に籍を置くと同時に経済学部に入学せよ」と命じてきた。すぐに経済学部の事務室に行つて、この旨申し入れたが、両立しないといわれたので、願書の提出を中止し、この旨、父に報告した。私としてはや

はり哲學に執着があったのである。その後、子供達と共に生活するには、不経済でもあり不便でもあるというわけで、赤坂松町一五年に三番地、六年には五番地一に家を借り、上京中の父はここで宿泊

風に身を託しつつイスに休息している。いる父に対して、東大の哲学科に入学したいという希望をつけたと

は大里製糖所を日糖に六百五十万円で売却しているが、当時、鈴木の資本金は五十万円にすぎなかつたから、番頭としては、まさに殊勲甲に値する働きぶりであった父は、漸次実業家に変容しつつあってよく、また三十八年か

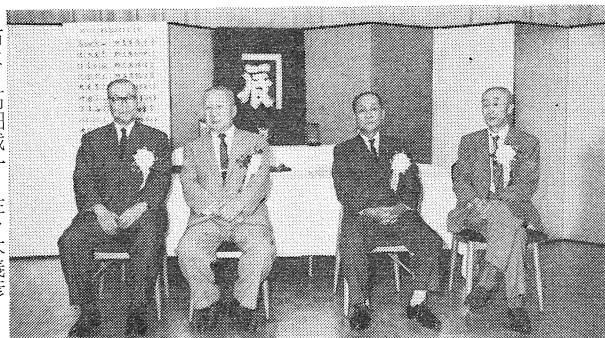
は神鋼の経営をも始めている。がんばり樟脳係の番頭にすぎなかつた父は、漸次実業家に変容しつつあってよく、また三十八年か

はこの食堂の北側に玄関があつたのではないかと思う。

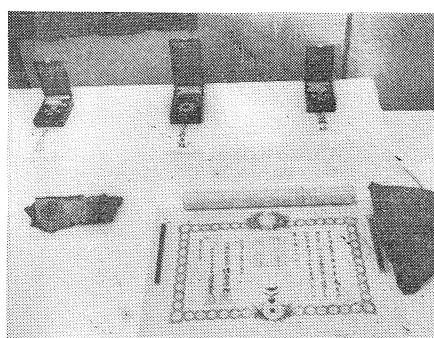
たしかに茶人が隠棲するには、
これは格好の家であった。身近に
迫る二の谷川のせせらぎと、日に

よつてあるいは激しいあるいはかすかに聞こえる松籟とは茶人の心耳をますますに十分であり、宵に騒の音や漁夫の船歌がひびいてくる。松林を通りぬけて国道に出るゝと、当時はまだ電車が通じていなかつたので（塩屋まで通じたのは大正二年五月）あまりほこりは立たず、毎日どこからか老夫婦が舞台を運んできて、馬車、手車をひく人々に餅を売るというのどかな光景に接することができた。そうしてこの谷川の小さな鉄橋をくぐりぬけると、文字通り青松白砂の須磨浦であつて、散歩には好適である。それに家の西側の坂を一町ばかりのぼると、そこは鉄拐の峰がなだらかな傾斜をなしていて、須磨療育院があるから、医者の心配もないものである。ただなにぶんにも谷間の家であるので、うすぐ人の隠棲には格好の家であった。

商工評論辰 鈴木の巻に就いて



右より高畠誠一 佐々木義彦
勝屋利秋 六岡周三の各氏



等旭日中綬章) 小田嶋彥三(勲四等旭日小綬章) 勝屋利秋(勲三等瑞宝章) 賀集益藏(勲二等瑞宝章) 六岡周三(勲二等瑞宝章) 展示願い一般参会者の閲覧に供し大幡久一(勲四等瑞宝章) 竹田儀一(勲二等旭日重光章) 大屋高三(勲二等旭日重光章) 山本鍊造(藍綬褒章) 曾我野秀雄(藍綬褒章) の十一家を祝賀のため本日東京クラブ関東に御招待申上げましたところ夫々の御都合に依り高畠、佐々木・勝屋、六岡の四氏のみ御出席あり四氏の御高配によりその光栄を物語る勲章並に勲記を会場正面

受賞者祝賀会

明和四年正月二十一日

受賞者祝賀会

でもなきことながら、我等辰巳会員に取りても同門の大なる誇りとする次第でありますので光栄の左記諸氏（年令順）即ち高畠誠一、柳田幹事よりは石の外掲げられ鈴木色を一際鮮かに盛上挙げました。宴会形式バツフエ方式参会者來賓共八五名（別表の通り）定刻午後六時開会鈴木丸衛幹事社一覽表作製頒布の計画をも併せて発表され

(東三等瑞宝章) 佐々木義彦 (東三等旭日中綬章) 小田鳴彦三 (勲四等旭日小綬章) 勝屋利秋 (勲三等瑞宝章) 賀集益藏 (勲二等瑞宝章) 六岡周三 (勲二等瑞宝章) 展示顧等のうち西川政一幹事辰巳会を代表して叙勲・褒章受賞各位の栄誉をして叙勲・褒章受賞各位の栄誉を称える祝辞を述べ次で司会者より浅田長平先輩その他より寄せられることとなり文芸春秋編集月刊雑誌「文学界」に昨年十二月号より連載中の旧錦

一般参会者の閲覧に供し大幅久
い（勲四等瑞宝章）竹田儀一（勲
二等旭日重光章）大屋貢三（勲二
等旭日重光章）山本鍊造（藍綬褒
章）曾我野秀雄（藍綬褒章）の十
二会食歛談小刻の後高畠・佐々木、
村徳太郎先輩の音頭によって一同
する「鼠」の執筆者城山三郎氏（今夕來賓と
御欠席）の御紹介ありして參会予定のところ



祝賀会

十二河幹事の神賀詠門の即席あい文
の坂本寿日本発候社長より同社も
法人会員御参加の旨御申出あり一
同感激した次第であります。次で
柳田義一幹事より辰巳会善意の会
誕生を報告し本日の辰巳会会合を
第一回として発足爾今各例会毎に
実施致度旨を述べ会員の理解と応
歎に一入の興趣を添えました。右
の会合に対し金一封の御寄附あり
たることを会場に報告感謝致しま
した。最後に高畠辰巳会会長の御
発声にて高らかに辰巳会の万才を
三唱し一同歎を尽して散会しまし

なる申入れがあり事先代柳田富松にも及ぶので今回鈴木よね子を中心にしての企てに極力尽力した。目下江湖に鈴木を取り上げて行部中に三鬼陽之助著「日本家」の如き事実無根の記事さえ現われるので柳田家として同紙三百部を辰巳会に寄贈例会の為めに特に配布させて載く事とした。而してたつみ会不变の恩恵に対し心から感謝の意を表すことにしました。四〇・九・一〇（柳田）

なる申入れがあり事先代柳田富松にも及ぶので今回鈴木よね子を中心にしての企てに極力尽力した。目下江湖に鈴木を取り上げ三百部を辰巳会に寄贈例会の為特に配布させて載く事とした。

披露されました。その後御来会中の坂本寿日本発條社長より同社も法人会員御参加の旨御申出あり一
同感激した次第であります。次で柳田義一幹事より辰巳会善意の会誕生を報告し本日の辰巳会会合を第一回として発足爾今各例会毎に実施致度旨を述べ会員の理解と応

十河幹事の祝賀詩吟の朗詠あり交
歛に一入の興趣を添えました。右の会合に対し金一封の御寄附ありたることを会場に報告感謝致しました。最後に高畠辰巳会会長の御発声にて高らかに辰巳会の万才を三唱し一同歎を尽して散会しました。

披露されましたがその後御
の坂本寿日本発株社長より
法人会員御参加の旨御申出
同感激した次第であります
柳田義一幹事より辰巳会善
誕生を報告し本日の辰巳会善
第一回として発足爾今各例
実施致度旨を述べ会員の理

富子力げ本さ
え現わ三百部
に特に而して心からした。
同社も歓歎
あり一終了
。次でのた
意の会合を
会毎に解と応
三發會と來

たつみ会
感謝の意
配布させ
た。最後
唱し一同

不変の恩恵に対し、柳田家として同延に寄贈例会の為にして載く事とした。

め 紙 めり交
本日 あり
しま ふし
この御
の才を